

2020年3月31日 発行
九州産業大学『国際文化学部紀要』第75号 別刷

中島半次郎の教育学におけるニーチェ受容とその特質

九州産業大学国際文化学部 教授
松原 岳行

【論文】

中島半次郎の教育学におけるニーチェ受容とその特質

松原 岳行

はじめに

非教育学的な性格を有するニーチェ思想の教育学的意義を検討するうえで、過去の教育学者がニーチェ思想とどう向き合ってきたのかを解明することはきわめて重要な課題である。しかし、教育学におけるニーチェ受容史研究に一定の蓄積があるドイツ^{註1}とは対照的に、日本の教育学はこれまでニーチェ受容史研究に取り組んでこなかったため、どのような教育学者がこれまでニーチェ思想に言及してきたのかといった基本的史実の解明もほとんど進んでいない状況にある。

むろんニーチェ思想の教育学的意義を解明する試みの中で、例外的にニーチェ受容史に言及した論文もいくつかはある^{註2}。このうち、もっとも紙幅を割いてニーチェ受容史に言及したのは、下地秀樹の1998年論文「『ニーチェの学制論』再考」である。従来は篠原助市の1950年著作『欧洲教育思想史』が日本の教育学におけるニーチェ受容の先駆的事例と見なされていたが（高橋1982, 31頁）、下地は、1914年に出版された入沢宗寿の『近代教育思想史』を「教育学の専門書で、最初に断片的にではなくまとまった行数を割いてニーチェに触れている」と評価した（下地1998, 173頁）。また、ニーチェを19世紀の個人主義の代表者と位置づけた中島半次郎の『教育思潮大観』（1921）については、「これが、独立した章節をあてた最初の試みかもしれない」と指摘し（下地1998, 173頁）、さらに小西重直の論文「ニイツエの学制論」（1917）については、「やや異彩を放つ個別研究」と特徴づけた上でその内容を簡単に紹介した（下地1998, 174頁）。

1950年の篠原助市から1914年の入沢宗寿へと35年以上も歴史を遡及し、ニーチェ受容の先駆的事例に関する認識を塗り替えた下地の功績は評価すべきであろう。しかし、その一方で問題もある。第一に、1914年著作『近代教育思想史』における入沢宗寿のニーチェへの言及がさほど多くないということである。実際、同書中にニーチェが登場する箇所を全て抜き出せば、以下のとおりとなる。

「ナトルプ、ヴント、オイケン等につきては第四篇に至つてや、詳しく顧みやうと思ふ。ニーチェについても同様である。」(入沢1914, 365頁)

「併しながら社会中心、文化の機械化、工業化はその反動を生じて個人主義は生れた。ニーチェはかゝる思想家の先駆で、個人派の教育思想は明らかに彼の影響に立つて居るが、ニーチェ自身も亦教育制度を論じて『我が教育制度の将来』を遺し英訳もされて居る。ニーチェと共にトルストイもこの方面に影響を与えた思想家で、彼は自らヤスヤナポリヤナに一の学校を起して自由教育を施した。」(入沢1914, 509頁)

「【※引用者補：エレン・ケイが】ニーチェやダーウィンの影響をうけて居る事も勿論である。『児童の世紀』はこれの影響の下に彼女の浪漫主義、個人主義を述べたものではあるが、一方廿年の女教師の経験に本づいて居る事を記憶せねばならぬ。」(入沢1914, 553頁)

「スペンサーは外界の状態への適応といふ事に生活の意義を見出し、ニーチェは力を得る意志を以て生活の定義として居るが、吾々はこの二つを平均する事が必要である。」(入沢1914, 554頁)

「ニーチェやエレン・ケイが権威と束縛とを去つて児童を自由に置かうといふ主張はこれである。」(入沢1914, 581頁)

下地はこの入沢の1914年著作を「断片的ではなくまとまった行数を割いてニーチェに触れている」ものと評価したが、500頁を超える浩瀚な著作の中でニーチェは散発的に登場しているに過ぎず、どちらかと言えばむしろ「断片的」な言及にとどまっていると言えないか。少なくとも、入沢の1914年著作に対する下地の評価の妥当性には一定の留保が必要であろう。

第二に指摘すべきは、下地が紹介している中島半次郎には1921年の『教育思潮大観』以前に1914年の『人格的教育学の思潮』という著作があり、結論をやや先取りして言えば、同書のうちにニーチェに対するまとまった言及が確認できるにもかかわらず、下地がこの1914年著作『人格的教育学の思潮』にまったく触れていない点である。すなわち、日本の教育学におけるニーチェ受容の先駆的事例に関する認識は現時点において、一方で入沢の1914年著作が過大評価され、他方では中島の1914年著作が見落とされているという状況に置かれているのである。

以上の問題関心にに基づき、本稿では、中島半次郎の教育学におけるニーチェ受容の実態とその特質について考察する。中島半次郎(1871-1926)は、早稲田大学の前身である東京専門学校教授をつとめ、後に早稲田大学高等師範部長や同大学高等学院初代学院長を歴任した教育学者であるが、中島の教育学に関する先行研究はさほど多くなく、当然のことながら、中島教育学におけるニーチェ受容についての情報は、下地秀樹によるもの以外にはまったくない。そ

ここで本稿では、まず教育学者としての中島半次郎のプロフィールを簡単に紹介した後、その教育学におけるニーチェ受容の実態を時系列的に確認していく。中島教育学におけるニーチェ受容とその特質の検討を通して、ほとんど未解明状態にある日本の教育学におけるニーチェ受容の先駆的事例をできるだけ具体的かつ詳細に明示することが本稿の目的である。

1. 中島教育学におけるニーチェ受容の前史

(1) 中島半次郎のプロフィール

中島半次郎は1871年、士族中島半平の長男として熊本県に生まれた。母校である壺川小学校の助教師をつとめた後、1891年に東京専門学校文学科に入学、倫理科および国語科の教員免許状を取得して、1894年7月に同校を卒業した。1894年8月には雑誌『教育時論』の主任記者として就職したものの、1898年には東京高等師範学校研究科に入学し、教育学を学んだ。

1900年9月、東京専門学校の教授となり、教育史や教育学を担当することとなる。1906年10月には、吉野作造らとともに清国直隸省立在天津北洋師範学堂へ派遣され、1910年1月に帰国するまで教鞭を執った。また、1910年3月からは海外の教育事情視察と教育学研究のためドイツおよびイギリスに留学し、1912年に帰国した。

1913年9月からは早稲田大学高等師範部長をつとめ、1920年には早稲田大学高等学院初代学院長となったが、1926年3月には同ポストを辞任して大学本部の人事課長となり、同年12月、心臓麻痺によって急逝した。

上述したように、中島半次郎の教育学者としてのキャリアは1900年にはじまるが、当初からニーチェ思想に注目していたわけではない。実際、1900年の『普通教育学要義』、1902年の『教育史教科書』、1907年の『近世教育史教科書』、1910年の『東洋教育史』や『日清間の教育関係』など、中島は教育史や教育学に関する著書を次々に出版するものの、ニーチェには一切触れていない。

もっとも、この時期の中島の関心が日本や東洋に向けられていたことは、1906年から1910年にいたる清国派遣の事実からも明白であろう。ただ、西洋教育学をまったく取りあげていないわけではなく、たとえば1902年の『教育史教科書』においては、およそ半分の紙幅を西洋教育史が占めている。

1902『教育史教科書』金港堂 目次

- 総論 教育史ノ性質及び其必要
- 第1章 本邦古代ヨリ王朝時代ニ至ルマデノ教育
- 第2章 支那古代ヨリ唐代ニ至ルマデノ教育
- 第3章 仏教ト本邦教育
- 第4章 鎌倉及び室町時代ノ教育
- 第5章 徳川時代ノ教育
- 第6章 希臘羅馬時代ヨリ文芸復興時代ニ至ルマデノ教育
- 第7章 宗教改革ト教育トノ関係
- 第8章 十七世紀の（ママ）教育
- 第9章 十八世紀ノ教育
- 第10章 十九世紀ノ教育
- 第11章 欧米現時ノ学制
- 第12章 本邦維新以後ノ教育

具体的に言えば、第8章ではコメニウス、ロック、フランケ、第9章ではルソー、バゼドウ、カント、第10章ではペスタロッチ、フレーベル、スペンサーらが紹介されているが、やはりここでもニーチェの名前は一度も登場しない。この時期の中島にとってニーチェ思想は教育学の圏外にあったのである。

(2) 不健全な教育思想としてのニーチェ思想

—1905年著作『戦後の教育』—

この時期の著作で例外的にニーチェの名前が登場しているのは、1905年に目黒書店から出版された『戦後の教育』である。まずは本書の執筆意図から確認しておこう。中島は「自序」の冒頭において次のように述べる。

「今回の戦捷は、実に我国の位置を世界の一等国に進め、優に世界の大部分に与る国柄たらしめたるが、翻りて考ふれば、十分列強と駆逐する上に、猶我国力薄弱の感なきを得ず、我国力此上の充実は、今日最大の急務にして、之に対する教育の方針施設は、亦大に其面目を改むる所なかるべからず。本書は乃ち上篇に、今回戦捷の原因を究め、それより引きて我国力の批評を試み、我国家が何を以て世界

に立つべきかの天職を論じ、中篇に之に応ずる教育の方針を説き、下篇に現時の教育の改むべき点、新に施設すべき点を指摘し、此国勢一大転歩の時を以て、教育社会従来の弊を一洗し、同時に戦後の経営に於て、教育を其主なるもの、一に加ふるにあらずば、帝国永遠の発達を為すこと能はざる主張を訴へたるものなり。」(中島1905, 自序1-2頁)

むろん「戦後」とは日露戦争後のことを指しているが、この文章からは、戦争の勝利に沸き立つ当時の状況とその時代を生きた教育学者の昂ぶる口吻とを感じ取ることができると言えよう。実際、中島は本書を「我忠勇なる陸海軍人に献ぐ」(中島1905, 自序4頁)としている。さらに注目すべきは、世界の列強に比肩しうような国力の増大を「教育」の力によって果たすべきと主張した中島の教育学者としての姿勢である。というのも、中島とニーチェ思想とのファーストコンタクトは、まさにこのような磁場において、すなわち国力の増大を企図した教育=国民養成にとってニーチェ思想がどのように作用するのかという問題圏において実現したからである。では中島は実際にニーチェ思想をどう捉えたのか。

教育の充実によって国力の増大を果たそうとする中島は、「国民養成の上に、不健全なる教育思想の流布し来ることは、厳格に之を排斥せざるべからず」(中島1905, 102頁)との見解を示した。中島によれば、これらの思想は「中に一分の真理を攫み、一種の意見として聞くべき価値あるも、之を応用する場合に弊を生じ易く、殊に識見の未だ定まらざる児童青年に向つて之を奨説する場合には、人を誤り、世を誤る結果を見るに至ることなしとせず」(中島1905, 102頁)という教育的な観点から不健全と見なさざるを得ないという。注目すべきは、中島が不健全な教育思想のひとつとして「美的生活論」を挙げている点である^{註3}。

美的生活論とは、1901年8月、雑誌『太陽』に掲載された高山樗牛の一文「美的生活を論ず」のことを指す。日本の文学や哲学におけるニーチェ受容史を詳細に解明した杉田弘子によれば、高山樗牛は当時「日本主義の主張者として年来国家至上の立場をとり、日清戦争後の三国干渉を国家的屈辱として国民の心情に訴えてきた論壇の寵児」であったが、その彼が、本能の満足こそが美的生活であるという主旨の発言をしたために「新聞、雑誌はいっせいにこれを取りあげ、美的生活論の是非を論ずる記事が続出」し、さらに「ニーチェ通の第一人者と目されていた登張竹風(明治六年—昭和三十年)が、樗牛の主張はニーチェ思想に基づくものであると解説したことから、美的生活論即ニーチェ主義という通説がなりたち、美的生活論議はニーチェ論議へと発展」した(杉田2010, 24頁)。とりわけ坪内逍遙をはじめとする早稲田派は美的生活論を「無道德主義」、「教育の賊」、「社会のバチルス」と酷評し、高山樗牛や登張竹風と激しい論戦を繰り広げたという(杉田2010, 24頁)。中島はまさにこのような時代状況の中で1905

年著作『戦後の教育』を執筆したのである。

「美的生活論、亦古くより東西に唱ふる人ありて、人情の幾微を捉へたる一種の人生観なり。世の道德に拘々たらず、至醇の人情に立ちて此世を樂めば、茲に真も善もありと為す。一分の真理あれども、其美は感情の一時の満足に陥り、一定の道理に従はざる時に、人をして放逸に陥らしむ、之にニーチェの、意の儘に、あらゆるものに打ち勝ちつゝ進めといふ教結ぶ時は、殆んど人をして放恣に陥らしむ。聞くもの之を喜び迎へて、其規律なき生活を弁護するの辞と為し、而して世は元禄時代の弊風を復興するに至らむ。」(中島 1905, 103-104頁)

自らも早稲田派に属し、実際に坪内逍遙とも親交のあった中島が(青木2015)、このような見解を示すのは当然であろう。中島にとってニーチェ思想は最初、無規律の生活を礼賛するがゆえに青少年に悪影響を及ぼす不健全な教育思想と見なされ、教育学に受容するどころか、断固として拒絶しなければならないような思想、いわば教育学の敵だったのである。

2. 中島教育学におけるニーチェ受容の実態—1910年代の著作から—

(1) 哲学的個人主義としてのニーチェ思想

—1912年著作『独逸教育見聞記』—

1910年1月、清国から戻った中島は同年3月からドイツに渡り教育学研究に従事するが、この留学中に彼は、ドイツをはじめとするヨーロッパ各国の教育学にニーチェの思想がポジティブな影響を与えていることを知るようになる。

「一昨明治四十三年の春三月より昨四十四年の夏八月に至るまで約一年半、伯林を主とし、独逸の各地に在りて教育学を研究する傍、其実際を視察したる記録」(中島1912, 自序1頁)として1912年に出版された『独逸教育見聞記』には、イエナ大学のW.ライン(Rein, W. 1847-1929)が主催する夏期講習会^{註4}に中島が参加した際の報告が記されている。中島によれば、この講習会にはドイツ各地から各専門分野の講師が招聘され、参加者はドイツ国内外から総勢600人ほど、その主な職業は小中学校の教師であり、また参加者のうち約3分の1は婦人であったという(中島1912, 501頁)。では、中島はラインらによる講義に対してどのような感想を抱いたのであろうか。

「ライン氏の講義は、力ありて言辞明白、多くの外国人に喜ばれしも、其所説はヘルバルト派を出でず。折々学説上より教育の時事問題に移り、之が解釈を与ふる所は氏が実際に遠ざからぬ学者たるを証すべし。」(中島1912, 512頁)

中島のライン評は以上の通りである。ヘルバルト派の域を出ない点は消極的に捉えられているが、教育実践に対する関心の高さや講義そのものの雰囲気は高く評価されていると言えよう。ただ、中島がもっとも紙幅を割いて感想を述べているのは、ブッデ (Budde, G. 1865-1944) の講義についてである。中島は次のように述べる。

「ブッデ氏の講義は学者風にして、多くの聴衆に満足を与へたり。氏は現時の精神的運動と教育との関係につき、已に四種の書を著はし、又イエナ大学教授オイッケン氏の新理想主義を奉じて更に一書を著はし、之を教育上に持来して教育学上の一派を立てんとしつゝある人にして、新進の気に富める人の如く見ゆ。」(中島1912, 512-513頁)

当時のドイツにおける各種の精神的運動の教育的意義について精力的に研究を進め、イエナ大学のオイケン (Eucken, R. 1846-1926) の新理想主義を教育学に受容しようとする新進気鋭の教育学者として、ブッデが高く評価されていることは明らかであろう。注目したいのは、ブッデが講義中にニーチェの名前を挙げている点である。「個人主義の題目に於て、哲学的個人主義としてニーチェを挙げ、其説を教育上に持来せるエレン、ケーの個人的教育学を説き…」(中島1912, 513頁)と中島も報告しているように、ブッデはこの講義においてニーチェ思想を「哲学的個人主義」と特徴づけ、『児童の世紀』の著者として有名なスウェーデンの女流教育家エレン・ケイ (Key, E. 1849-1926) への影響関係について明言したのである。

1912年著作『独逸教育見聞記』におけるニーチェの登場はこの1箇所のみであり、しかもブッデの講義の要約中に触れられるという間接的言及にとどまっていることから、これをもって中島自身の教育学におけるニーチェ受容と見なすことはできない。しかし、このイエナ夏期講習会において、無規律な快樂至上主義や不健全な教育思想とは異なる新たなニーチェ解釈——哲学的個人主義および個人的教育学の理論的支柱としてのニーチェ評価——の可能性を中島が感じ取ったのもまた事実である。中島半次郎によるニーチェ思想の教育学的評価がはじまるのは、このドイツ留学後のことである。

(2) 個人的教育学としてのニーチェ思想

—1914年著作『人格的教育学の思潮』—

1913年9月に早稲田大学高等師範部長に就任した中島は、1914年2月に『人格的教育学の思潮』を出版した^{註5}。人格的教育学とは、主知主義や機械的教授による教育の合理化に対して教師や生徒個人個人の「人格」の意義を強調する、オイケンやリンデによって提唱された教育学である。中島自身の言葉を借りるなら、「人格的教育学は、児童の人格を尊重し、其人格の根底に立ち入り、其内省直覚の力を覚まし、其創造力を助長し、其心情、其生命に触れて之を練り上ぐべく、而して之を練り上ぐる教師の人格が、亦教育の上に重大の働を為すべきを認め、結局教育の活動は、科学的に規定せられたる教育上の法則に従ふよりも、寧ろ教師の人格と児童の人格と触れ、其所に新生命を創造する所に存すと主張」（中島1914、自序1-2頁）する点に特徴を持つ、19-20世紀転換期ドイツに顕著となった教育学的思潮のひとつである。同書の執筆経緯を中島は次のように述べる。

「教育学研究の爲め欧州に赴くに当つての余の心願の一つは、従来我国に紹介せられた教育学の外に、十分我が胸裏に共鳴を感じる如き教育学の思潮のありはせぬかを尋ぬるにあつた。かくて明治四十三年の春から翌年の夏まで独逸にある間に、其諸大学を訪ひ、諸教育学者に接し、著書や雑誌に親しむ中、人格的教育学の思潮が、他の教育学派と並び、(…略…)末遂に大河となつて横溢すべき勢のあるのを認めて渴望を慰し、斯学研究の上に多大の参考の資料を得た。」(中島1914、自序1頁)

この引用から、1910年3月から翌1911年8月までのドイツ留学中に人格的教育学の将来性や意義を肌で感じ、他の教育学者に先駆けて^{註6}その思潮を日本に紹介しようとする中島の意図を読み取ることができる。このうち、中島が主にニーチェ思想を論じているのは、第1部に収録された第8章「個人的教育学派」である。

第1部 独逸に於ける教育研究の現状

第1章 教育上の流派

第2章 人文主義の主張

第3章 実科主義の主張

第4章 国家的人文主義の主張

第5章 ヘーゲル学派

- 第6章 ヘルバルト学派
- 第7章 社会的教育学派
- 第8章 個人的教育学派
- 第9章 実験教育学派
- 第10章 作業教授と芸術教育

中島は第8章の冒頭で「独逸に於ける個人的教育学の主張者はフリードリッヒ、ウィルヘルム、ニーチェ（一八四四—一九〇〇）を推さねばならぬ」（中島1914, 57頁）と述べ、この時期としてはかなり本格的なニーチェ論を展開する。

中島がまず行わなければならなかったのは、そもそも教育学の圏外に位置しているニーチェに教育論があり、したがってまたニーチェ思想が一定の教育学的意義を有するという新たな事実を示すことであった。中島はニーチェ論の冒頭で次のように述べる。

「ニーチェは教育者でも教育学者でも無く、寧ろ哲学者にして詩人を兼ね、倫理学者にして時代の批評家を兼た一大天才であるが、其哲学其倫理学からして、教育の方面にも一個の定見を有し、千八百六十九年二十五にして瑞西のバーゼル大学の古典の教授に聘せられ、其教授である中千八百七十二年の一月から三月にかけ、「我が教育制度の将来」と題し、五回の講演を試みた。此中にニーチェの個人的教育学の意見が能く現はれて居る。」（中島1914, 58頁）

ここでは、教育者でも教育学者でもないニーチェが中島によって「一大天才」と高く評価され、バーゼル大学教授時代の若きニーチェが行った連続講演「われわれの教養施設の将来について」を根拠として、ニーチェ思想が教育学的に評価されている。また、別の箇所では、「此大天才の教育意見は、瑞典の女流の天才エレン、ケイに伝はつて茲に個人的教育学は今少し纏まりたる形にて現はれ、教育界に革新の声を挙げた」（中島1914, 63頁）と述べたうえで、「ケイの説ける所と、ニーチェの説ける所とを対照して見れば、如何にケイがニーチェの思潮に影響せられて居るかゞ分る」（中島1914, 66頁）と指摘し、教育学においてすでに一定の評価を得ていたケイに対するニーチェの影響力を強調することで、ニーチェ思想の教育学的意義を説得的に示そうとしている。では、個人的教育学と特徴づけられるニーチェの教育観を中島はどう理解したのだろうか。

「ニーチェが教育の目的とする所は、ユーパーメンシュ即ち超人を作るに在つて、それには天才の人

を保護し、その十分なる発達を為すやうに計（ママ）らねばならぬとして居る。ニーチェは最も明に天才教育の必要を唱道した人である。」（中島1914、58頁）。

ここで目を引くのは、中島がニーチェの掲げる教育理想として「超人」を挙げている点である。なぜなら、初期思想に属する先述の連続講演には、天才教育への言及はあるものの、後期思想に属する「超人」という言葉は一度たりとも登場しないからであり、さらに言うなら、「超人」に代表される後期思想こそがニーチェ思想を教育学の圏外に追いやってきた張本人だからである。すなわち中島は、ニーチェ思想の全体を視野に入れながら、その教育学的意義をほかならぬ超人育成理論として解明しようとしたのである。では中島はニーチェの「超人」思想をどう解釈したのか。

「然らばニーチェが教育の目的として作らんとする超人とは如何なるものであるか」と中島は問い、超人を「精神に於ても身体に於ても強く、思想豊富にして新境地を開く勇気を有し、常人が動物の上に位せる如く、常人の上に位し、無限に精進する力を有し、善悪といふが如き相対的道德に囚はるゝこと無く、自ら価値の定め手となるが如き自由なる又偉大なる人格」（中島1914、60頁）と定義づける。また中島は、プラトンが教育によって哲人を育成し理想の共和国を作ろうとしたことを引き合いに出しながら、ニーチェが「超人の支配する新社会を教育に依りて作るべきことを説いて居る」（中島1914、61頁）と述べつつ、超人を「絶大なる聡明の人」や「絶大なる意力を有して居る人」（中島1914、61頁）とも特徴づける。1890年代ドイツのニーチェブームや1900年代日本の美的生活論争におけるネガティブな超人理解とは対照的に、ここでは、新たな社会を支配すべき「自由かつ偉大なる人格」「聡明かつ意力的な人」としての超人の姿がきわめてポジティブに描かれていると言えるだろう。さらに中島は、「真の教化を目的として超人を作る」には「自己修養を為さしめ」、「至純な道徳的性能を発達せしむる」ことが必要であると述べ（中島1914、61頁）、超人の育成を目指すニーチェ思想を自己教育や道徳性発達といった具体的教育理論として捉え直してもいる。

こうして中島は、排すべき不健全な教育思想という1905年著作『戦後の教育』における自身のニーチェ理解を訂正するかのようになり、「ニーチェは決して本能主義の張本人では無い」（中島1914、61頁）と述べ、ニーチェを個人的教育学派の代表的存在として高く評価したのである^{註7}。

(3) ニーチェ思想に対する積極的評価のトーンダウン

—1915年著作『人格的教育学と我国の教育』と1917年著作『教育学』—

1914年著作『人格的教育学の思潮』ではニーチェ思想を積極的に評価していた中島だが、その続編にあたる1915年著作『人格的教育学と我国の教育』ではそのトーンが落ちている。以下、同書におけるニーチェの登場シーンを実際に確認しておこう。

「ニーチェが言つた通り「真の教育者は一つの自由になつた人でなければならぬ」。此点から言へば彼は基督教を攻撃しながらこの精神を取つてゐるのである（フェルステルの「学校と品性」）。（中島1915, 211頁）

「但し学校生活に於ける衆多の力は動々もすれば児童の独立の精神を奪ひ之を俗化し易い。ニーチェは共同は俗悪を造ると言つてを。それで俗衆に対し個人の良心を保持することは品性養成の根本義であらねばならぬ。」（中島1915, 230-231頁）

1915年著作『人格的教育学と我国の教育』におけるニーチェへの言及は以上である。人格的教育学ないし個人的教育学の代表者として紹介されることもなく、わずかに2箇所だけ、散発的にニーチェの言葉が援用されるにとどまっている。中島によるニーチェ評価が量的にも質的にもトーンダウンしていることは明らかであろう。この急激なトーンダウンはなぜ起こったのか。ここで注目すべきは、中島自身が語る本書の執筆意図である。

「本書は余が昨年二月公にしたる「人格的教育学の思潮」の続編とも見るべきものである。「人格的教育学の思潮」は独逸に起れる此思潮を紹介し解説するを主として、其十分なる批評を為すに及ばず、又其実際教育、殊に我国の教育に対する関係を説くこと詳で無かつたから、之を補はんとの意にて本書を著はした。」（中島1915, 自序1頁）

ここには1915年著作の執筆経緯とその意図が明確に示されている。すなわち、人格的教育学というドイツの教育思潮を単に紹介するにとどまった前作とは異なり、本書では、教育実践への適用可能性、とりわけ日本の教育学への受容可能性が具体的な検討課題として設定されているのである。以上を踏まえるならば、急激とも思えるニーチェ評価のトーンダウンの原因はやはりこの点に求められるのではないか。

ニーチェが教育者でも教育学者でもないということは、中島自身がすでに認めていたとおりである。受容のレベルが「諸外国の教育事情の紹介」から「我が国への実践的適用」へと切り

替わることによって、ニーチェ思想の前には厳しい教育学の壁が立ちはだかることになったのである。実際、その後の中島の著作を見ると、1916年『独仏英米国民教育の比較研究』や1919年著作『教育の改造』にはニーチェへの言及が全くない。また1917年著作『教育学』においては、これまで自己教育や道徳性発達の先にある教育的理想像として高く評価されていた「超人」の見方が次のように下方修正されている。

「…個人は社会に従属すべきものにあらず、寧ろ意力の十分に秀でたる超人が、あらゆるものに打勝ちつゝ進み、以て価値の定め手、制度法律の制定者となり、社会の開化変じ行くを以て始めて進み行くことを得とする独のニイチェ（一八四四—一九一〇（ママ））の如きありて、個人の価値を高調せるが、此見解も、個人が社会に働き社会を進め行く点を指摘せるもの理ありと見るべきも、如何なる英雄若しくは超人も、全く社会に反しては其力を伸ばすこと能はず、却りて時世の子として社会の大勢に駆られ、其先導者となるは拒むべからざることを以て、結局個人と社会とは有機的關係あることを証明することゝなる。」（中島1917, 44-45頁）

個人主義の象徴である「超人」も決して絶対的な存在ではなく、社会との有機的關係なしにはあり得ない相対的存在であることが、中島によってきわめて客観的かつ冷静に指摘されている。また、本来1900年であるはずのニーチェの没年が1910年と誤って表記されていることも付け加えるべきかもしれない。むろん、中島自身のミスではない可能性もあるが、ニーチェの生没年に誤植があることは事実である。校正作業の中でも見落とされるほどニーチェは中島にとって軽い存在になってしまったとも考えられよう。少なくとも1915年の『人格的教育学と我国の教育』や1917年の『教育学』を執筆したこの時期の中島においては、1914年の『人格的教育学の思潮』のようなニーチェ思想の積極的評価は鳴りを潜めているのである。

3. 1921年著作『教育思潮大観』における両義的評価

—貴族主義的文化哲学としてのニーチェ思想—

(1) 教育学 < 教育思潮

中島がニーチェ思想に対して両義的評価を見せていることは以上から明らかであろう。まさにこのような両義的態度が顕著に示されているのが、下地秀樹も紹介した1921年の著作『教育思潮大観』である。全体の構成は、第1章が人文主義、第2章が実科主義、第3章が宗教主義、第4章が理想主義、第5章が自然主義、第6章が機械主義、第7章が個人主義、第8章が社会主

義、第9章が国家主義、第10章が国際主義となっており、ニーチェが詳述されるのは個人主義と題された第7章のうち、第6節「ニーチェの個人主義」^{註8}および第7節「ニーチェの影響」である。

第7章 個人主義

1. 個人主義の起源
2. 基督教の個人主義
3. 近世初期に於ける個人主義
4. 18世紀に於ける個人主義
5. 19世紀に於ける個人主義
6. ニーチェの個人主義
7. ニーチェの影響
8. トルストイの教育思想
9. モンテッソリーの教育思想
10. ラッセルの教育論
11. 東洋に於ける個人主義
12. 個人主義の将来

第5節「19世紀に於ける個人主義」において中島は、「十九世紀を通じて個人主義の教育思潮は其の命胚を保ち、時あつて国家主義及び社会主義に対して大なる反抗運動を試み来つたが、就中最も顯著たる代表者は実に独のフリードリッヒ・ニーチェである」(中島1921, 228頁)と述べた上で、第6節「ニーチェの個人主義」をこう書き出している。

「ニーチェ(一八四四—一九〇〇)は純粹の意味にて哲学者でもなければ、教育学者でもないが、其の個人主義は痛く現代の思想界に影響を及ぼし、其の絶妙なる文辞、神秘的なる寓言、直裁奇警の短句は実に人心を感動せしめ、殊に青年及び婦人に対する感化力は著しく、又彼の個性と悲痛なる一生とは衷心人の共鳴と感激とを買ふに足り、而も能く現代人の煩悶を描写し、現代の病弊に適中せる所より其の感化は頗る大なるものがあつた。現に我が国に在つても明治三十四五年の頃よりニーチェ思想盛んに紹介され、其の是非の論は当時の批評壇を賑はしたることは周知の事実である。彼が折に触れて発表せる教育観の如き能く独逸教育の弊を指摘し、独逸文化の短を發き、兼ねて一般教育思想界

の反動的気運を激発せしめた。」(中島1921, 228-229頁)

まず注目すべきは、中島が冒頭部分においてニーチェを「純粹の意味にて哲学者でもなければ、教育学者でもない」と言い放っていることである。教育者や教育学者ではないが哲学者としては認められていた1914年時点でのニーチェ評よりも一段と厳しくなり、ニーチェが教育学だけでなく学問全体からも追放されてしまっているかのような印象すら受ける。いずれにせよ、1921年著作における中島は以前よりも徹底してニーチェ思想の非教育学的性格を強調するのである。

しかし、興味深いことに中島は、さまざまな理由を挙げながら、非教育学的な性格を帯びたニーチェ思想の教育学的意義を主張しようとする。ニーチェ側の理由としては、彼の思想がドイツのみならず日本においても大きな影響を及ぼしたという実績と、ニーチェにも教育論が存在するという事実が指摘されているが、中島の側でも非教育学的なニーチェ思想を確実に受容できるような評価枠組みが用意されている点に注目したい。鍵を握るのは、1914年の書名にも用いられた「思潮」という言葉である。すなわち中島は、1921年著作の「序説」で、「此処に言ふ思潮は、教育学者、教育實際家の間に立てらるゝ教育学説、若しくは教育理論といふよりは今少しく広汎に至り、政治経済の変動から、哲学科学の進歩から、又宗教芸術の如き立場からも教育に対して立てらるゝ考察をも含み、総て広く教育に就きての主義主張を指したものである」(中島1921, 1頁)と述べ、あらかじめ考察の射程を最大限に拡張しているのである。

(2) 肯定的評価

では、中島は具体的にニーチェ思想をどう評価したのだろうか。まずは、中島がニーチェ思想の全体、すなわちニーチェの第1期＝初期思想・第2期＝中期思想・第3期＝後期思想のすべてを考察の対象としていることに注目しておこう。実際、中島はニーチェの著作で有名なものとして、初期思想に属する『悲劇の誕生』、中期思想に属する『人間的、あまりに人間的』、さらに後期思想に属する『ツァラトストラかく語りき』、『善悪の彼岸』、『道徳の系譜』、『偶像の黄昏』を挙げている(中島1921, 229-230頁)^{註9}。また中島は「ニーチェの思想は前後三期に画することを得る」とし、第1期を「芸術的に世界人生を眺め、内心の苦悩を脱却せん」とした時期、第2期を実証的に「一切の知識を試験下に置き、斯くして普通に真理と称せられたるものの多くを排し去った」時期、第3期を「真理そのものの妥当性を疑ひ」はじめた時期と特徴づけたうえで、「第一、二期の著述も興味あり諷刺に富めるのではあるが、彼の最も特色的なる教説は一千八百八十二年以後の著述中に現はれて居る」と述べ、後期思想の重要性を強調

した（中島 1921, 235-236 頁）。後期思想に着目することでニーチェ思想の意義が最大限に引き出せると中島は考えたのである。

次に指摘しておきたいのは、中島が初期から後期に至るまでニーチェ思想の全体を通底する統一的原理を見出しているという点である。

「ニーチェの著作を通じて其の見地は前後屢々変化したが、其処に自ら統一的原理を求めることが出来る。ニーチェの哲学は始終一貫顕著なる貴族主義的傾向を帯べる文化の哲学であり、而して其の中心問題は究極的善の本質如何といふに在つた。若し人生が生活の甲斐あるものならば、如何なるものが然か為すのであるか、人生最高の価値あるものは何ぞや、是れ実にニーチェの中心問題であつた。」
（中島 1921, 234-235 頁）

中島はこのように述べ、ニーチェ思想を貫く「統一的原理」として貴族主義的文化哲学を、ニーチェの「中心問題」として人生最高の価値の追求を挙げた。ニーチェ思想がしばしば変転することは中島自身も認めているとおりで、こうしたニーチェの思想を俯瞰的に捉え、そのうちに「統一的原理」や「中心問題」を読み込もうとした中島の姿勢は、教育学者というよりもはやニーチェ研究を専門とする哲学者さながらである。

中島は、ニーチェ思想の貴族主義が「社会的地位上の貴族主義ではなく、全く精神能力上の貴族主義」であることを指摘したうえで、ニーチェが「社会的地位又は財産の力に依りて教育を受くる特権を定むる反対して居る」点を評価する（中島 1921, 240 頁）。また中島はこうも述べる。「ニーチェは所謂普通平凡の教育を排し、教育は児童の個性に応じて極力之が伸張を計（ママ）らねばならぬとし、又其の個性には長所と短所とありて、其の短所を矯めんとして偏頗なく発達せしめんよりも寧ろ長所を十分に伸ばせば、これまで現はれざりし力を伸ばさしむることが出来ると考へたのである。」（中島 1921, 240 頁）——貴族主義的な傾向を帯びた文化哲学としてのニーチェ思想はまた、子どもの個性を伸ばす教育思想としても解釈可能となる。ニーチェ思想はここでも教育学的に高く評価されたのである。

（3）否定的評価

しかし、その一方で中島は、ニーチェ思想が抱える問題点や限界を冷静に見極めてもいる。たとえば、「勿論彼の個人主義は必ずしも其の独創とは称し難く、従つて所謂超人の説の如きも、彼れ以前既に其の先蹤なしとせず、殊にダーキン（一八〇九—一八二）の進化論はニーチェの超人説に密接なる影響を与へた」（中島 1921, 230 頁）とか、「吾等は当にニーチェの超人説及び

一切価値の顛倒説の先蹤をスティルナーに於て見出すべきである」(中島1921, 234頁)などと述べ、「超人」思想をめぐるニーチェのオリジナリティを否定するような見解を示している。

また、教育学の領域におけるニーチェ思想の適用可能性についても中島は厳しい評価を下す。すなわち彼は、「斯くニーチェが当時の科学者及び言語学者が只管枝葉末節の研究に耽り、従つて何等の教養何等の文化の存せざることを説けるは勿論正当である」としながらも、「ニーチェは将来の学校、即ち教育的設営としては少数の優秀者が偏に教養文化に到達せんがために参集するが如き特定の設営を建つるに在りと考へた」がゆえに、「彼が文化及び教養の育成場を何処に求むるかに至つては頗る非実行的のものたるを免れなかつた」(中島1921, 239頁)と批判したのである。

ニーチェ思想を教育学的に評価するうえでもっとも障壁となったのは、ニーチェ思想の貴族主義的性格である。1914年著作において個人的教育学と称されていたことから明らかなように、ニーチェ思想の教育学的意義は、その個人主義のうちにこそ求められなければならない。しかしニーチェの場合、個人主義と貴族主義は表裏一体のものであった。中島は別の箇所ですのように述べる。「個人主義は其の理想の社会としては種々になつて居つて、ニーチェの如きは貴族的な超人の支配する社会を建設せんとし、トルストイやエレン・ケイの如きは人道主義に依る社会を建設せんとして居る」(中島1921, 372頁)。ニーチェが直接批判されているわけではないが、貴族主義的なニーチェの超人思想との対比において、トルストイやエレン・ケイの人道主義的な考え方が評価されていると解釈することもできよう。中島は第6節「ニーチェの個人主義」を次のように締めくくっている。

「以上はニーチェの教育説の大意であるが、彼が個性の權威を尊重し、其の十分なる發揚を主張したる点は確かに長所であるが、兎角、其の個人主義は一種の反抗性を帯べる哲学であり、従つて、既成の宗教及び既成の道德を初め、學術的及び社会的傳統に対して悉く反抗の態度に出で、社会上の一切の規律を否認し、寧ろそれは超人の定むる規律に拠らねばならぬと爲し、此の考から児童の無制限なる自由を主張し、且つ感情本位に傾き、遂に彼の思想よりして教育の一般原理を求め得られざる欠点の存することは明白である。而して、彼が普通凡俗の教育標準に依つて教育し、又それを強ふるが如くんば、焉んぞ獯猛なるチェザレ・ボルギア(ママ)又はかのナポレオンの如き彼の所謂理想の人物なるものを造り出すことを得ようぞといへるに至つては、殆ど常軌を以て律すべからざるものがある。」(中島1921, 240-241頁)

個性の權威を尊重した点は辛うじて長所と捉えられてはいるものの、その後は、ニーチェ思想

の短所が立て続けに指摘されていると言えよう。具体的に言えば、ニーチェの個人主義は「反抗性」を帯びており、学術や社会的伝統の一切を軽視して半ば感情的に児童の無制限の自由を主張するがゆえに、「彼の思想よりして教育の一般原理を求め得られざる欠点の存することは明白である」点、また普通凡俗の教育を批判するためにチャーザレ・ボルジアやナポレオンを理想的人物と見なすようなニーチェの極論に対しては「殆ど常軌を以て律すべからざるものがある」として、これまでにないほど痛烈に批判している。以上から明らかなように、貴族主義的文化哲学と特徴づけられたニーチェ思想を教育学的に評価する作業は決して容易ではなかったのである。

(4) 両義的評価の調停

中島の次なる課題は、以上に見たような肯定的評価と否定的評価の狭間でどう折り合いを付けるか、すなわちニーチェ思想に対する自身の両義的評価をどう調停するかという問題であった。ここで重要となるのは、ニーチェ思想の非教育学性をどうクリアするかという点であろう。中島が出した解決策は、ニーチェ思想そのものを教育学の「学説」として直接的かつ具体的に評価するのではなく、ニーチェその人の「人格」や「影響」という次元においてその思想の教育的意義を間接的に示すというものであった。

実際、中島の著作を見てみると、教育に関するニーチェの発言はいずれも「教育観」や「教育論」や「教育説」などと表示され、「教育学」や「教育学説」といった呼称は几帳面に回避されていることがわかる。また、たとえば「折に触れて教育論を試みた」(中島1921, 237頁)とか「彼が折に触れて発表せる教育観の如き能く独逸教育の弊を指摘し、独逸文化の短を發き、兼ねて一般教育思想界の反動的氣運を激發せしめた」(中島1921, 229頁)のように、もともと教育学者ではないニーチェが、あえて教育について発言し、一定の成果を収めていることを中島は強調する。教育学者が本来クリアすべき諸条件を免除し、ニーチェ思想に対する要求水準をあらかじめ下げることによって、その意義を相対的に高めようとしているとも言えよう。

中島は「ニーチェの個人主義は之を大観すれば、一個の反抗的思想といふことが出来るが、然らば、彼は如何なる時代精神に対して反抗したりしか」(中島1921, 241頁)と問い、次のように述べる。

「当時の唯物主義及び実証主義の自然科学的方法は偏に事物の外的關係の研究に専らにして、人心内奥の精神生活を没却し、実験心理学は只管抽象的なる実験室の研究に汲々として是れ亦人心の神秘を忘却し、何れも知識一点張りに偏して、本能、衝動、感情、意志を無視又は軽視するの傾向があつた

から、尚ほ更らニーチェの思想が反抗的態度を採らざるを得なかつたのである。斯かる背景の下にニーチェ一流の文章と情熱と悲痛なる人格及び不遇の一生と相複合して、非常に目ざましき影響を一般思想界に波及せしめた。」(中島1921, 243-244頁)

貴族主義的なニーチェの個人主義は、たしかに教育学が許容し得ないような反抗的性格を帯びている。しかし、ニーチェ思想の反抗性にはそれ相応の背景や事情があるのであって、教育的ないし学問的でないという理由だけでニーチェの意義そのものが消失するわけではない。むしろ、自らを精神崩壊にまで追い込んでしまうほど徹底的に考え抜いたニーチェだからこそ、その影響力は無視できないものとなったのではないか。中島はそう考えた。

実際、中島は「ニーチェの影響を最も鮮かに教育思想上に現はしたもの」としてラングベーンLangbehnの著作『教育者としてのレンブラント』を、「ニーチェの個人主義を奉じたるもの」としてラガルデの名を、そして「ニーチェの影響を受けた一人」としてエレン・ケイの名を挙げているが(中島1921, 244-245頁)、これは、すでに教育学の領域において定評のある教育家や教育学者に対するニーチェ思想の影響力を強調することで、ニーチェの教育的な意義を説得的に示そうとする戦略と解釈すべきだろう。

大日本学術協会が1927年に公刊した『日本現代教育学大系—中島半次郎氏教育学、長田新氏教育学、武政太郎氏教育学、及川平治氏教育学—』によれば、「中島氏の教育思想は(…略…)あきらかに人格主義的教育学説」であるが、もともと中島自身の教育的関心は多方面に亘っているため、人格的教育学の中に「諸種の教育主張を包摂し、これを全一的に説いてをることは言ふまでもない」(大日本学術協会1927, 92頁)。また、「どこまでも氏の学説の特色は、一面に偏せず党せず、終始一貫して大所高所から分裂分散せる教育思想を統合せんとせる点にある」(大日本学術協会1927, 92-93頁)とも指摘されている。

そもそも教育者でも教育学者でもないニーチェを取りあげている点、またニーチェの教育観が直接的に示された初期思想(とりわけ講演論文「われわれの教養施設の将来について」)のみならず、ニーチェの特色が顕著に示された後期思想(とりわけ「超人」思想)にも目を向けながらニーチェ思想を全体として捉えている点、さらに言うなら、ニーチェ思想に対する中島自身の肯定的評価と否定的評価をほかならぬニーチェその人の「人格」のうちに調停し、ドイツをはじめとするヨーロッパ教育界への影響の大きさを強調することで、非教育的なニーチェ思想の教育的意義を主張した点などを踏まえれば、中島教育学におけるニーチェ受容は文字通り「一面に偏せず党せず、終始一貫して大所高所から分裂分散せる教育思想を統合せん」ことを目指したものだと言えりかねない。

おわりに

中島半次郎にとってニーチェ思想はもともと教育学の圏外に位置する「不健全なる教育思想」でしかなかった（1905年『戦後の教育』）。しかし、1910年以降のドイツ留学中にヨーロッパの教育界に対するニーチェ思想の影響力の大きさに触れ（1912年『独逸教育見聞記』）、その思想の魅力や意義に気づきはじめた中島は、帰国後、ニーチェ思想を個人的教育学として高く評価するに至る（1914年『人格的教育学の思潮』）。ところが、日本の教育学や教育実践へのニーチェ思想の具体的受容を企図した中島は、非教育学的性格を帯びたニーチェ思想の限界を知ることとなり（1915年『人格的教育学と我国の教育』、1917年『教育学』）、最終的にはニーチェ思想に対して両義的な評価を下した（1921年『教育思潮大観』）。

本稿においては、これまでほとんど知られてこなかった中島半次郎の教育学におけるニーチェ受容の実態を明らかにすることができた。日本の教育学におけるニーチェ受容の先駆的事例として下地秀樹が紹介した1921年著作『教育思潮大観』も重要ではあるが、本稿で詳しく見たように、1914年の『人格的教育学の思潮』も決して看過し得ない重要な著作であるということも明白であろう。少なくとも、「教育学の専門書で、最初に断片的ではなくまとまった行数を割いてニーチェに触れている」著作は、下地の言う入沢宗寿の『近代教育思想史』ではなく、中島半次郎の1914年著作『人格的教育学の思潮』であると書き換えなければならないのではないかと。いずれにせよ、日本の教育学におけるニーチェ受容の先駆的一事例を具体的に示したことが本稿の意義である。では、中島の教育学におけるニーチェ受容の特質として何を指摘できるだろうか。

第一に、中島がニーチェ思想の非教育学的性格をかなり明確に自覚しながら、それでもニーチェ思想の教育学的意義を主張しようとしていた点である。実際ニーチェは、1914年の著作では「教育者でも教育学者でも無く」（中島1914、58頁）と、また1921年の著作では「純粹の意味にて哲学者でもなければ、教育学者でもない」（中島1921、228頁）と厳しい評価を受けている。しかし、その一方で中島は、たとえば自己教育や道徳性発達といった教育的理想として「超人」を解釈するなど、ニーチェ思想をかなり積極的に評価している。やや逆説的ではあるが、ニーチェがそもそも非教育学者であるというある種のエクスキューズが、ニーチェ思想の教育学的評価を可能にしているという側面もあるのではないかと。いずれにせよ、ニーチェ＝非教育学者というプロフィール紹介は、ニーチェ思想の教育学的意義を論じる近年の試みにおいても半ば常套句的に用いられる傾向があることから、中島のニーチェ受容は、非教育学的性格を帯びたニーチェ思想の教育学的意義を検討した先駆的試みとして一定の価値を有している

ると言えよう。

第二に、中島がニーチェ思想に対して両義的評価^{註10}を見せつつも、ニーチェその人の人格や人生を引き合いに出しながら、最終的にはニーチェ思想の影響を受けた教育家のうちにその教育学的意義を投影させようとしている点である。なぜなら、上述したニーチェ思想の非教育学的性格とも関連するが、ニーチェ思想の学説としての欠陥や弱点をニーチェその人の人格のうちに解消しようとするこの種のニーチェ解釈パターンも、その後の教育学におけるニーチェ受容史において一定の役割を果たすことになるからである。個人的教育学という肯定的評価の一方で（正）、貴族主義や非実現性など非教育学的思想という否定的評価をも下した中島は（反）、ニーチェ思想それ自体を教育学の学説として評価するのではなく、ニーチェの人格やその影響を受けた他の教育学者の学説という別のステージにおいて肯定的に評価しようとした（合）。中島の教育学におけるニーチェ思想の両義的評価は、ニーチェの人格やニーチェ思想が与えた実際の影響という次元において、いわば弁証法的に止揚されているのである。

しかし、こうした中島教育学におけるニーチェ受容の実態と特質が具体的にいかなる意味を持つのかをより詳細に解明するためには、たとえば1917年に「ニツイエの学制論」という論文を発表した小西重直（1875-1948）や1922年出版の『教育辞典』に「ニーチェ」の項目を掲載した篠原助市（1876-1957）、1930年代以降ニーチェを一貫して「生の哲学者」と評価した長田新（1887-1961）など、他の教育学者らによるニーチェ受容との比較作業が欠かせない。また、そもそも教育学におけるニーチェ受容史研究のアクチュアリティを示すためには、本稿のような成果を、現在もなお続くニーチェ思想の教育学的意義解明の試み^{註11}へと還元することも重要であろう。これらについては今後の課題としたい。

【註】

註1 ドイツ教育学におけるニーチェ受容史については一定の研究蓄積がある。たとえば次のものを参照。

- ・ Niemeyer, Ch./Drerup, H./Oelkers, J./Pogrell, L.v. (Hrsg.) 1998: Nietzsche in der Pädagogik? Weinheim.
- ・ Niemeyer, Ch. 2002: Nietzsche, die Jugend und die Pädagogik. Eine Einführung. Weinheim, München.
- ・ Hoyer, T. 2002: Nietzsche und die Pädagogik. Werk, Biografie und Rezeption. Würzburg.
- ・ 松原岳行 2011 『教育学におけるニーチェ受容史に関する研究—1890-1920年代のドイツにおけるニーチェ解釈の変容—』 風間書房。

註2 たとえば、高橋勝は篠原助市の1950年著作を（高橋1982, 31頁）、下地秀樹は入沢宗寿の1914年著作、中島半次郎の1921年著作、小西重直の1917年論文を（下地1998, 173-174頁）、石井慎一郎も小西重直の1917年論文（1923年著作収録版）を（石井2004, 15頁）、日本の教育学におけるニーチェ受容の先駆的事例と紹介している。ただし、いずれもニーチェ受容史の解明そのものをテーマに据えているわけではないため、示された成果には質的にも量的にも限界がある。

註3 不健全なる教育思想として中島は他に、利己説、平和説、社会主義を挙げている（中島1905, 102頁）。

- 註4 中島によれば、この夏期講習会の費用は以下のとおりで、中島は1週間コースを履修したようである。「入会金二円五十銭一科毎日一時間にして二週間を通ずる者は五円。一週間にて終るものは二円五十銭なり。科外講義には、無料のものあれど、多くは一回五十銭を徴す。遠足、集会の費用は又別に徴す。寄宿は会の書記に申込みば適當の所を世話す。一週間の費用、食事部屋代を併せ十二三元なり。」(中島1912, 515頁)
- 註5 同書は翌1915年までに6版を重ね、本稿はその第6版を典拠としている。
- 註6 中島による先行研究レビューは以下のとおりである。「此思潮の中、リンデの「人格的教育学」は、余が滞欧中、佐々木吉三郎氏が「教育研究」誌上に其大意を紹介せられたが、本書に於けるものは氏のよりは遙に委しくなつて居る。又ブッデの学説は、近時乙武岩造氏、入沢宗寿氏が、雑誌や著書に紹介せられて居るが、本書に於けるものは、それ等よりも委しくなつて居り、其他の主張者の所説も、すべて本書に含め、殊に余は此思潮の全系統を示したき考から、其教育の目的方法制度に対する学説を、務めて系統的に示さんと試みた。」(中島1914, 自序3頁)
- 註7 同書の付録として、当時慶應義塾海外留学生で後に教育学者となる小林澄兄による感想文「『人格的教育学の思潮』を読む」が収録されているが、その中で小林は次のように述べている。特筆すべきは、ニーチェとペスタロッチが並記されていることであろう。「…人格的教育学の思潮は我国に於て別けて高調されなければなるまいと思はれる。けれどもこれまで述べたやうな意味の教師はどこを尋ねてもさうあるものではない。現代の殆どあらゆる教師は、顧みて自己教育をなすの必要に迫られなければならぬ筈である。芸術家的の心眼を開いて、先づ自己を内省し革命するが如き謙虚にして而も偉大なる教師——Amanたらんことを要求しなければならぬ筈である。でなければ教育の事は凡て「退屈」の一語に葬られて了はう。この退屈を救済するに足る、暗示力は何といつても、ニイチェの思索的狂熱とペスタロッチの実行的熱誠とであらう。」
- 註8 目次には「ニーチェ」、本文中には「ニーチェの個人主義」とある。
- 註9 中島による表記はそれぞれ『悲劇の出生』、『人間的余りに人間的』、『ツァラーツーストラ如是録』、『善悪の彼岸』、『道徳の由来』、『偶像の微光』となっている(中島1921, 229-230頁)。
- 註10 ニーチェ思想に対する中島の両義的評価は、中島の死後、1927年に有志によって出版された遺稿『教育の本質』にも確認できる。両義的評価の調停がうまくなされない場合、中島の見解は肯定と否定とのあいだを揺れ動くことになる。たとえば以下の箇所を参照されたい。「各学校の系統が立てられる場合に、その系統をたどるものが、社会の階級によつて分けらるゝことは合理的でないが、被教育者の才能によつて分けられることは已むを得ないことである。これに対し、独逸のフリードリッヒ・ニイチェ(一八四四年—一九〇〇年)の如きは、人の天分を案じ、衆に優れたる天才の人は、これを超人たらしむるがために全くの修養を目的として、十分その天分を發揮せしむる制度をたどらしむべく、これに対し普通平凡の者はその衣食の道を得しむるために實際実用的の教育制度を立て、その系統をたどらしむべしと論じたのであるが、人の能力が果して十分によく測られて修養の系統をたどるべき者と、実用的の系統をたどるべき者との区別が容易に立てられ得るかは問題であるのみならず、修養と実用とこれを二者別々に考ふることも、必ずしも是認すべきではないが、学校の系統を正す上からいへばかゝる区別が立てられぬこともない。」(中島1927, 168-169頁)
- 註11 たとえば以下のものが挙げられる。
 相澤伸幸1998「『ツァラトゥストラ』にみるニーチェの自己形成思想」『教育哲学研究』第78号, 1-16頁。
 相澤伸幸2000「ニーチェ形成論へのゲート自然学的アプローチ—ニーチェの教育学的人間形成論の構築に向けて—」『旭川大学女子短期大学部紀要』第29号, 1-18頁。
 相澤伸幸2002『ニーチェと人間形成論—近代ドイツの教育学的人間形成論の系譜において—』博士論文・東北大学, 総頁数197頁。
 相澤伸幸2004「ニーチェ「力への意志」と人間形成論」仙台ゲート自然学研究会編『プロテウス—自然と形成—』第7号, 91-108頁。
 相澤伸幸2005「ニーチェ<永遠回帰>と人間形成論」仙台ゲート自然学研究会編『プロテウス—自然と形成—』第8号, 101-126頁。
 相澤伸幸2003「教育学的視点から見たニーチェの<超人>」仙台ゲート自

然学研究会編『プロテウス—自然と形成—』第9号, 95-114頁。石井慎一郎2003「言語と教育についてのニーチェの思想」筑波大学外国語センター編『外国語教育論集』第25号, 29-36頁。石井慎一郎2004「日本の教育思想とニーチェ—美育あるいは芸術教育について—」筑波大学外国語センター編『外国語教育論集』第26号, 11-20頁。井西弘樹2016「ニーチェ「教育者としてのショーペンハウアー」におけるGeniusと人間形成」『教育思想・教授法研究年報』第1号, 2-15頁。今井康雄2003「ニーチェの教養批判と言語批判」(課題研究: <教養>の語り方をめぐって—他者・経験・物語—)『教育哲学研究』第87号, 23-28頁。大川勇2006「ニーチェの教養理念—『われわれの教育機関の将来について』にみられるフンボルトへの回帰—」京都大学大学院人間・環境学研究科社会システム研究刊行会編『社会システム研究』第9号, 1-11頁。尾田生馬2001「ニーチェにおける人間の「形成」」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第47巻第1部, 1-5頁。小野塚正樹2007「ニーチェにおけるニヒリズムと人間形成」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第56集, 第1号, 11-28頁。小野塚正樹2008「ニーチェのBildung思想における「超越」の構造—「人はいかにして本来のおのれとなるか」をめぐって—」東北教育哲学教育史学会編『教育思想』第35号, 81-98頁。小野塚正樹2009「ニーチェの人間形成思想における生肯定の原理—「ディオニュソス」概念を中心に—」東北教育哲学教育史学会編『教育思想』第36号, 91-103頁。小野塚正樹2011「ニーチェにおける愛と人間形成」東北教育哲学教育史学会編『教育思想』第38号, 77-87頁。黒柳修一1994「F.W.ニーチェの教育思想についての一考察—「生涯学習論」との関連で—」『武蔵野美術大学研究紀要』第25号, 113-119頁。阪本恭子1994「F.ニーチェの教育観—<Zucht>の概念を手掛かりにして—」大阪大学文学部編『待兼山論叢(哲学篇)』第28号, 29-43頁。阪本恭子1996「F.ニーチェにおける子供・道徳・教育」日本道徳教育学会編『道徳と教育』No.290-291, 311-315頁。阪本恭子2014「医療教育におけるヒューマニズムの原点—ニーチェの教育観と人間観を手がかりにして—」『大阪薬科大学紀要』第8号, 75-82頁。清水本裕1980「ニーチェの教育観—三つの側面から見た教育者ニーチェ—」渡辺二郎・西尾幹二編『ニーチェ物語—その深淵と多面的世界—』有斐閣, 267-269頁。下地秀樹1998「『ニーチェの学制論』再考」立教大学文学部教育学科研究室編『立教大学教育学科研究年報』第42号, 169-180頁。高橋勝1982「F.W.ニーチェ—「自己教育」思想の開拓者—」天野正治編『現代に生きる教育思想 第5巻(ドイツ②)』ぎょうせい, 13-47頁。谷山弘太2017「道徳教育における倫理的相対主義の意義—中期ニーチェの道徳批判から—」『関西教育学会年報』第41号, 21-25頁。内藤貴2001「ニーチェにおける遠近法主義のダイナミズム—ニーチェの自己形成論に関する一考察—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第52号, 63-70頁。内藤貴2006a「初期ニーチェにおける陶冶論と教育論—Bildung理解を中心として—」三田哲学会編『哲学』第115号, 1-23頁。内藤貴2006b「ニーチェの人間形成論における価値観・世界観の変容に関する研究—ニーチェの教育論および人間形成論の解明を目指して—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第62号, 177-179頁。仲井幹也2016「ニーチェの高等教育論について」長崎大学経済学会編『経営と経済』第95巻第3・4号, 25-56頁。原弘巳2002「ニーチェと人間の「形成」」『愛媛大学教育学部紀要: 第1部(教育科学)』第48巻第2号, 1-18頁。舟越清1985「ニーチェの教育観(一)」成城大学文芸学部編『成城文芸(人文・社会編)』第38巻10号, 146-159頁。松田愛2012「ニーチェ後期思想における宗教と「教育」という問題」日本宗教学会編『宗教研究』第8巻第4号, 294-295頁。松田幸子2004「ニーチェの「教育者としてのショーペンハウアー」」『上田女子短期大学紀要』第27号, 1-9頁。水野清志1974「ニーチェの教育論」『実存主義』以文社, 58-61頁。溝口隆一2000「「永遠回帰」における教育の重要性について」『関西教育学会紀要』第24号, 31-35頁。溝口隆一2002「誘惑と自己教育—ニーチェ哲学の教育的属性—」同志社大学哲学会編『哲学論究』第17号, 23-42頁。溝口隆一2003「ニヒリズム時代の道徳教育—遺稿におけるニーチェのニヒリズム論の研究—」『関西教育学会紀要』第27号, 16-20頁。溝口隆一2004「ニーチェの「解釈」に基づく公民教育の原理」『関西教育学会紀要』第28号, 11-15頁。溝口隆一2006「ニーチェにおける知の伝達としての教育」同志社大学哲学会編『哲学論究』第20号, 1-22頁。宮澤知江美1991「ニーチェにおける自己教育—学校教育を包括するものとして—」『関東教育学会紀要』第18号, 53-59頁。宮澤知江美1993「ニーチェにおける言語と自己形成の問題」『教育哲学研究』第67号, 86-99頁。

麦倉達生1989「初期ニーチェの教育観」『滋賀大学教育学部紀要：人文科学・社会科学・教育科学』第39号, 11-34頁。森野衛1987「ニーチェ初期作品にみられる教育観」『沼津工業高等専門学校研究報告』第21号, 233-241頁。森本倫代2001「初期ニーチェにおける教育論—ギムナジウムにおける教養教育と自己教育思想—」青山学院大学教育学会編『教育研究』第45号, 1-14頁。森本倫代2006「ニーチェの「超人」思想—シュタイナーのニーチェ論を手がかりに—」『東京工芸大学芸術学部紀要』第12号, 79-83頁。諸富祥彦2000「ニーチェ」教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房, 542-544頁。山本恵子2005「ニーチェの哲学的教育論」『早稲田大学大学院文学研究科紀要（第1分冊）』第51号, 15-23頁。盧珠妍2010「初期および後期ニーチェにおける「仮象」概念の比較検討—「美的なもの」の人間形成論的な意義再考のために—」『教育哲学研究』第101号, 118-136頁。

【参考文献】

- 青木稔弥2015「坪内逍遙の書簡」（研究ノート）『日本近代文学』第93号, 160-167頁。
- 石井慎一郎2004「日本の教育思想とニーチェ—美育あるいは芸術教育について—」筑波大学外国語センター編『外国語教育論集』第26号, 11-20頁。
- 伊東久智2012「資料紹介「中島半次郎関係資料」目録」『早稲田大学史記要』第43巻, 230-304頁。
- 入沢宗寿1914『近代教育思想史』弘道館。
- 経志江2004「清国お雇い日本人教師—中島半次郎を中心に—」『日本の科学者』第39巻第7号, 371-382頁。
- 佐藤弘幸2019「吉野作造発信書簡—中島半次郎, 本庄栄治郎, 井川武, 柏木義円, 松岡駒吉宛—」（史料紹介）『吉野作造研究』第15号, 72-79頁。
- 下地秀樹1998「「ニーチェの学制論」再考」立教大学文学部教育学科研究室編『立教大学教育学科研究年報』第42号, 169-180頁。
- 杉田弘子2010『漱石の『猫』とニーチェ—稀代の哲学者に震撼した近代日本の知性たち—』白水社。
- 大日本学術協会編1927『日本現代教育学大系—中島半次郎氏教育学, 長田新氏教育学, 武政太郎氏教育学, 及川平治氏教育学—』モナス。
- 高橋勝1982「F. W. ニーチェ—「自己教育」思想の開拓者—」天野正治編『現代に生きる教育思想 第5巻（ドイツ②）』ぎょうせい, 13-47頁。
- 中島半次郎1900『普通教育学要義』開発社。
- 中島半次郎1902『教育史教科書』金港堂。
- 中島半次郎1905『戦後の教育』日黒書店。
- 中島半次郎1907『近世教育史教科書』金港堂。
- 中島半次郎1910-a『東洋教育史』早稲田大学出版部。
- 中島半次郎1910-b『日清間の教育関係』（非売品）日清印刷株式会社。
- 中島半次郎1912『独逸教育見聞記』日黒書店。
- 中島半次郎1914『人格的教育学の思潮』同文館。
- 中島半次郎1915『人格的教育学と我国の教育』同文館。
- 中島半次郎1916『独仏英米国民教育の比較研究』教育新潮研究会。
- 中島半次郎1917『教育学』早稲田大学出版部。
- 中島半次郎1919『教育の改造』早稲田大学出版部。
- 中島半次郎1921『教育思潮大観』東京堂書店。
- 中島半次郎1927『教育の本質』（遺稿）教育研究会。
- 山本剛2017「「中島半次郎関係資料」と高等学院の教育」（「資料に見る早稲田」第3回）『早稲田ウィークリー』2017年1月13日号, <https://www.waseda.jp/inst/weekly/column/> 2017/01/13/21713/

松原 岳行

早稲田大学文化資源データベース／早稲田人名データベース「中島半次郎」https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg={%22subDB_id%22:%2216%22,%22id%22:%22738%22}&lang=jp